様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５年　６月　６日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００８～２０１２
課題番号：２０５２０３５５
研究課題名（和文）　世界知識と語彙意味：より豊かで体系的な語彙意味論の構築をめざして
研究課題名（英文）　World Knowledge and Lexical Meaning: Toward the Enriched System of Lexical Semantics
研究代表者
由本　陽子（YUMOTO YOKO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：９０１８３９８８

研究成果の概要（和文）：語彙が表す事物に関する世界知識のうち統語構造の決定や語形成の制約に関わる意味要素を抽出し、生成語彙論の枠組みで形式化した。また、派生語や複合語の意味解釈がもとの語彙の意味からどのような合成メカニズムによって導かれるかを明らかにした。具体的には、英語の名詞からの転換による動詞形成、日本語の「名詞＋形容詞／動詞」「動詞＋動詞」型の複合を扱い、生成語彙論の特質構造によって表された名詞や動詞の意味がいかに複合語の統語的・意味的性質を決定するかを示した。

研究成果の概要（英文）：In this project, we've extracted grammatically relevant semantic features of the lexical meaning which determine the phrasal structure or restrict various word formation processes and tried to represent them in terms of Qualia Structure in the framework of Generative Lexicon. We've also revealed the conflation mechanism of the Qualia Structures in derivatives or compounds. Specifically, we dealt with denominal verbs in English and 'N+A/V' and 'V+V' compounds in Japanese to show how the Qualia Structures of nouns and verbs determine the semantic and syntactic features of the compounds.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	９００，０００	２７０，０００	１，１７０，０００
２００９年度	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００
２０１０年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
２０１１年度	１，０００，０００	３００，０００	１，３００，０００
年度			
総　計	３，２００，０００	９６０，０００	４，１６０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：語彙意味論、特質構造、名詞転換動詞、複合動詞、複合形容詞

１．研究開始当初の背景

Pustejovsky (1995)が提唱する生成語彙論の枠組みを用いて、影山(2005, 2007)や小野(2007)などが項の具現形式や語形成における様々な言語事象を説明する分析を提案しているが、文や複雑語の意味解釈に特質構造による分析を適用するにとどまっている。特質構造が語彙意味論の原点に沿うものなのか、すなわち grammatically relevant な意味要素のみを語彙意味として記載するという立場からして必要な意味記述なのか、また、必要だとすれば、どの範囲で世界知識を取り込み、それらをどのように形式化すべきか、といった問題は未解決のままなのである。また、

動詞や形容詞の特質構造にどのような意味情報がどのような形式化によって記載されるべきかについては、研究者によって意見が分かれている。動詞については、たとえば、項構造を決定する語彙概念構造をそのまま特質構造に反映させる影山の立場は、Pustejovsky や小野とは異なっているし、アスペクト素性を表す事象構造と特質構造との関わりについても明らかにする必要がある。また、形容詞の特質構造に関しては、ほとんど議論がなされていないのが現状である。本課題は、これらの問題を踏まえ、特質構造を組み入れたより豊かで体系的な語彙意味論の構築をめざして発案した。

２．研究の目的

母語話者の語彙にまつわる世界知識のうち文法に関係する要素を抽出し、それらを特質構造において形式化することから始め、次にその特質構造と語彙概念構造との連携により文や複雑語の意味、また、項の具現形式が説明できるメカニズムを明らかにする。特に以下の点に焦点をあてる。

（1） 名詞の特質構造が単に意味解釈に貢献するだけではなく語形成においては新造語の項構造の決定に関わる、まさに grammatically relevant な意味情報であることを示す。

（2） 動詞の特質構造にはどのような情報をどのように整理して記載すべきかを明らかにする。また、項構造を決定すると考えられている語彙概念構造と特質構造との関係づけについても考察する。

（3） 形容詞の特質構造にはどのような情報をどのように整理して記載すべきかについて明らかにする。特に、段階性や極限値の有無について、特質構造でどのように扱うべきかを考察する。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、具体的には以下の２点を中心に英語と日本語のデータ観察を行い、考察を行った。理論的枠組みは、生成文法の統語論を前提としながら、レキシコンについては生成語彙論の特質構造と共合成などを用いた意味解釈メカニズム(Pustejovsky 1995)やスキーマ転換(小野2007)などを用いた意味拡張メカニズムを採用した。

（1） 英語の名詞転換動詞(e.g. bottle, pin, nurse, powder, etc.)の意味解釈において名詞の特質構造のうちどの役割の情報が基盤となっているのか、また、名詞転換動詞の項構造がどのように決定されているかを観察した。

（2） 名詞の特質構造を利用して形成されると考えられる日本語の「名詞＋動詞の連用形」（e.g. 鷹狩り、水たまり、レンガ造り、ペン書き）や「名詞＋形容詞」（e.g. 幅広、色白、計算高い、奥深い）などの複合語について、二語の特質構造がどのように合成され複合語の意味が解釈されるのかを考察した。また、複合語が述語として用いられる場合、項構造の決定や項の具現形式に名詞の意味がどのように影響するのかを明らかにした。

（3） 動詞や形容詞の特質構造としてどのような情報が必要であるのかを、主に語形成に関わる制約と複雑語形成における結合価の変更の有無を観察することにより考察した。

４．研究成果

（1）英語の名詞からの転換については、よく知られているように、もとの名詞の意味から多様な意味関係をもつ動詞が形成され、先行研究では最終的にはコンテクストに依存する語用論の問題として片付けられていた。本研究では、名詞の意味を特質構造を用いて表示することにより、転換動詞の意味はコンテクスト次第で名詞のどの役割を基盤として導くことも可能であるが、特別なコンテクストが与えられない場合には、目的役割を基盤として決定されている場合が非常に多いことを指摘し、その理由として、物体のほとんどは人工物であり、その性質のうちもっとも重要視されるのは何のために使用されるかを前提としているからであると主張した。また、特に目的役割に記述される事象構造がそのまま転換動詞の項構造に反映されることから、特質構造が grammatically relevant な意味要素であることを示した。この研究成果は図書①等において公表した。

（2）日本語の「名詞＋動詞」型の複合も多様な意味と範疇の複合語を形成することが知られている。本研究ではそのうち「する」と直接結合して動詞として用いられる場合（e.g. ペン書き、瓶詰め、色づけ）について、先行研究では顧みられていなかった名詞の特質構造に注目した分析を提案した。特に、Sugioka (2001)による、項と結合した場合にはモノ名詞となり、付加詞と結合した場合には複雑述語となる動名詞が形成されるとする一般化に反し、内項が結合している場合であっても「する」と直接結合できる動名詞が形成される場合があることを指摘し、その条件を明らかにした。総括的に言えば、動詞が表す事象に関わる名詞を語の内部で満たし

ても、さらに語の外部で満たすべき項がある場合には、複雑述語として成立するということである。Sugioka(2001)の一般化では、付加詞の結合に注目したが、これも前述の条件によって説明できる。付加詞を語の内部に表したところで、動詞の結合価は減じられないからである。動詞の項にあたるものと結合していても複雑述語として成立するものには大きく分けて 2 タイプがある。ひとつは、動詞が三項動詞の場合で、結合する名詞の目的役割によって語彙的に束縛される名詞を項とする動名詞が形成される場合（瓶詰め、車庫入れ）である。もうひとつは、構成役割において物体の特徴づけをする部分として規定される名詞（e.g.　色、格、値 etc.）と結合する場合で、その場合には、動詞の結合価が減じられる場合（「格付け」）と変わらない場合（「値上げ」）とがある。後者は、結合した名詞によって新たな項が創出され、そのことにより複合語が述語としての機能を獲得することから、この分析によっても、特質構造が grammatically relevant な意味要素であることが証明された。この成果をまとめた論文は国際的に権威のある学術誌に採用され掲載された（雑誌論文④）。

（３）日本語の「名詞＋動詞」の複合のうち、名詞が身体部分を表すものである場合（e.g. 口出し、口どめ、手入れ）について、「する」と直接結合して動詞となるもの（「仕事の話に口出しする」）と「を」の介入が必要なもの（「封筒の口どめをする」）、また、動詞の結合価が減じられるタイプ（「仕事の話に口出しする」）と結合価が変わらないタイプ（「テープを頭出しする」）があることを指摘し、それらがどのように異なり、なぜそのような違いを生じるかを生成語彙論の枠組みによって説明した。この成果は雑誌論文⑤によって公表した。

（４）日本語の「動詞＋動詞」型の語彙的複合について、語彙概念構造だけは明らかにできなかった問題点について、特質構造を組み入れた語彙意味記述によって新たな解決の糸口を見つけられることを示した。特に、前項動詞の目的役割と後項動詞の主体役割によって動詞の組み合わせの制約が説明されることなど、由本(2005)では捉えきれなかった語彙的複合語形成の条件を明らかにした。また、後項動詞がほとんど原義を失い補助的動詞と化しているものの共通点を明らかにした。また、それらが前項動詞との結合においてどのような意味合成によって解釈されているかを、生成語彙論の道具立てで説明し、日本語の語彙的複合動詞の生産性の高さが、それらの意味合成メカニズムによって支えられているものであることを主張した。この成果をまとめた論文の一連の論文は日本言語学会の口頭発表（学会発表①）など複数の学会で公表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８件）
①由本陽子、語彙的複合動詞の意味解釈再考、言語文化共同研究プロジェクト 2011、査読無、(2012)、89－99
②由本陽子、語彙意味論の新展開、日本語学臨時増刊号、査読有、30 巻 14 号(2011)、39－49
③由本陽子、日英語におけるクオリア構造を利用した語形成、言語文化共同研究プロジェクト 2010、査読無、(2011), 91-100
④ YUMOTO Yoko 、 Variation in N-V Compound Verbs in Japanese, *Lingua,* 査読有, 20 (2010), 2388-2404
⑤由本陽子、身体部分を表す名詞を結合した日本語の［N+V］複合語について、言語文化共同プロジェクト 2009, 査読無、(2010)、89－98
⑥由本陽子、複合動詞における項の具現、レキシコンフォーラム、査読有、No.4 (2008)、1-30

他 2 件

〔学会発表〕（計６件）
①由本陽子、日本語語彙的複合動詞の生産性と二つの動詞の意味関係、日本言語学会 2012.11.24、九州大学
②由本陽子、動詞複合による項の創出と主題役割の変更、NINJAL International Symposium on Valency Classes and Alternations in Japanese, 2012.8.5.　国立国語研究所
③由本陽子、「名詞＋動詞」型の複合動詞形成と意味構造における項の語彙的束縛、日本言語学会、2011.6.19　日本大学
④由本陽子・王蓓淳、中国語複合動詞「改Ｖ」の形成と意味―日本語の「Ｖ＋かえる」「Ｖ＋直す」との比較を参考に―、日本言語学会、2009.11.28.　神戸大学

他 2 件

〔図書〕（計８件）
①由本陽子、開拓社、レキシコンに潜む文法とダイナミズム（単著）、2011, 194+xi
②由本陽子、ひつじ書房、これからの語彙論（斎藤倫明・石井正彦編）、2011, 135-148（掲載頁）
③由本陽子・影山太郎、大修館書店、日英対照 名詞の意味と構文（影山太郎編）、2011, 178-208（掲載頁）

④由本陽子、くろしお出版、日中理論言語学の新展開③ 語彙と品詞（影山太郎・沈力編）、2012, 123-143（掲載頁）
⑤由本陽子・影山太郎、大修館書店、日英対照形容詞・副詞の意味と構文（影山太郎編）、2009, 223-257（掲載頁）
⑥由本陽子、くろしお出版、語彙の意味と文法（岸本秀樹氏との共編）、2009,209-229（掲載頁）
⑦YUMOTO. Yoko, くろしお出版、*The Dynamics of the Language Faculty.*（星宏人編）,2009,203-230.（掲載頁）
⑧由本陽子、学苑出版社、『漢日理論言語学論文集』（趙華敏・沈力編）、89-97（掲載頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
由本　陽子（YUMOTO YOKO）
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：９０１８３９８８

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：